

## C分科会（概要）

|                                       |   |
|---------------------------------------|---|
| <p>幼稚園、保育所、認定こども園との連携や小学校との接続について</p> | <p>協議の視点<br/>         幼児と児童の交流や保幼小の教職員の意見交換・合同の研修等が継続的に行われ、接続を見通した教育課程が編成・実施されるようにするためには、連携・接続の体制づくりや教職員の資質向上などについて、どのような工夫や配慮が必要か。</p> |
|---------------------------------------|---|

### 三原市幸崎幼稚園の提案

#### 1 研究主題

自分の思いや考えを表現する子供の育成

～人とかかわりを通した言葉の育ち～（幼保小接続カリキュラムの実践を通して）

#### 2 取組の概要

幼児期の教育から小学校教育への円滑な接続を図るため、幼稚園・保育所と小学校の双方が接続を意識する期間を「接続期」（5歳児から小学校第1学年までの期間）というつながりでき、  
 「育ってほしい子供の姿」を幼保小で共有し、子供の発達と学びの連続性を踏まえ、幼稚園・保育所から小学校へと育ちをつなぐ教育課程や指導方法の在り方について探り、実践している。

①教育課程の再編成と実践 ②「育ってほしい子供の姿」にせまる保育の充実

③教師間の連携 ④家庭との連携

以上の内容で具体的な取組をしている。

#### 質疑応答

○P.11の幼保小中交流活動年間計画を通して、小学校の児童との交流はどのような体制で行ったのか、ペアを組んで活動するなどのことをしているのか。

- ・1学期は特に1年生との交流を主に行っている。卒園児がどのように過ごしているのか、小学校生活の中で具体的な姿を見ることで、1年生になった時の生活のイメージができ、5歳児への良い刺激になっている。

- ・卒園児（保育所園児も含め）がいるところで、小学1年生と年長児がペアを組んで何回か交流している。本園は複式学級なので4歳児もいる。4歳児と5歳児がペアを組むことで、安心して小学1年生と年長児の交流活動に参加できるメリットがあるのではと考えている。

○年間計画の指導上の留意点のところに、「入学後を見通し5年生との交流を意図的に計画した」とあるが、なぜ、5年生なのか。

- ・2学期後半から3学期に主に交流をしている。5歳児が小学校へ入学した時に5年生が新6年生になり、かかわりが多くなる。入学前に顔見知りになっておくことや会話を交わしておくことで、小学校のお兄さんお姉さんに親しめるように意識して活動を計画している。

○育ちと学びをつなぐスタートカリキュラムの報告の中でP.14の④気分転換（クールダウン）をする環境の工夫という話があったが、気持ちの切り替えが難しい子供がいるのか。幼稚園ではどのような子供が使うのか。

- ・絵本の部屋がリラックスできる空間になっている。本園には特別な支援を要する子供が2名いる。遊びの様子を見ていると、ずっと遊びに入るのではなく、朝の登園を渋る場面もあったので、介助の先生と一担ゆったり過ごして一日をスタートする空間として、利用している。また、友達とのトラブルや家庭での問題など、悩みを抱えているときなどに、他の子供も利用し、絵本を読むなどして、リラックスする空間になっている。

小学校の図書室も入学当初の疲れがリフレッシュできる空間になるよう環境構成をしている。

- 以前、小学校の方から「複数の園・所から入学する場合、一園とだけ交流することは、メリットがあるのだろうか？」と言われたことがある。小学校は、交流、連携についてどのように考えておられるのか。
- ・学校によっては入学前の必要な連携もとれない場合もある。まずは小学校の方から本校の課題を幼稚園や保育所に伝える。課題の共有や、育てたい子供の姿を共通認識をすることから始めることが、接続のスタートではないかと思う。個の連携ではなく、学校、幼稚園、保育所で連携をすることが大切ではないか。
- ・いきなり子供から始めるのではなく、研修のスタイルを変える、保護者も巻き込むなど試してみてもどうか。

#### 協議内容

- 「園に行こう週間」などで小学校がまずは園に行ってみる。難しい場合は、プールなど施設を利用するなどしたらよいのではないか。クラス便りなどを小学校の先生にみてもらうことを通して、教師の意図的な援助や環境構成の工夫など知ってもらうことが、見に来てもらうきっかけづくりになるのではないか。
- 幼稚園はどういう子供に育てていきたいのか、小学校、中学校はどういうことを目指していくのかを共有する。互いを尊敬し合い、互いにプラスの方向で考え、理解し合うことが大切である。
- 地域全体でねらいをつなげることで、子供を育てる。計画中ではあるが、各学年交流をする。小学校の先生にどの教科や単元が交流できるか考えてもらう。幼小連携の窓口の先生を設けることも必要である。
- 「連携、連携」と身構えないで、できることからしていく。子供だけではなく、教師間もコミュニケーションがとれる関係づくりをする。

#### 課題

- カリキュラムの位置付けはどのようにとらえたらよいのか。
  - ・いきなり紙面ではなく、まずは互いの教育課程を持ち寄り、意見交換し、各所属に還元する。
- 小学校にどのようにアプローチしていったらよいのか。
  - ・互いを理解していく上でどのような役割があるのか認識することが大切であるので、合同の研修や意見交換の機会を設けていくように連携や調整を図っていく。

#### 結論

- ① [子供同士の交流]  
できるところからできる範囲で一步でも始めていく。交流活動後の意見交換を行い、次につなげることが大切である。困り感や課題を含めたものを次の交流や活動のねらいに位置付ける。
- ② [教師同士の交流]  
事後の振り返りを合同で行うことで、相互理解を深める。小学校教員が保育体験をすることで、子供が自分で考えて行動していることや、共同的な遊びをしていることなどを、実感してもらえる。
- ③ [カリキュラムの接続]  
カリキュラム（教育と保育の内容）を小学校へ発信していく。紙カリキュラム（形式的な紙面上だけ）をつくるのではなく、保育所、幼稚園、小学校で歩み寄り、段差を低くし、子供が安心して入学できるようにすることが大切である。  
幼稚園、保育所、認定こども園との連携や、小学校との連携を要望しているが、交流や連携を受け入れてもらうことが難しいところも多い。しかし、今できることを大切に、まずは、互いに歩み寄れるところから始める。